

「小学生・中学生・高校生のスポーツ活動に関する意識調査」のまとめ

群馬県高等学校体育連盟 研究部

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災の被災地では、震災後、3年の時間を経て、子ども達の体力が低下し大きな問題とされています。しかし、体力が低下しているのは被災地の子ども達だけでしょうか？

生活が便利になり、運動量の減った今日では、これまで以上に意識的に行う必要があると考えられます。スポーツ活動は運動量を確保するだけでなく、特に成長期の子ども達にとっては、**様々な効果が期待できる大変有意義な活動**です。しかし、すべての子ども、すべての県民が生活に取り入れているわけではありません。運動をする人とならない人の二極化が進んでいるとも言われます。

その理由はなぜなのでしょう。人々が必要性を感じていないのか、スポーツ活動に問題があるのか、社会の仕組みに問題があるのか、そんな疑問に少しでもせまり、より多くの子ども達がスポーツ活動に取り組みたくましい大人へと成長してほしいと考え、このアンケート調査を実施しました。

「スポーツ活動が社会に広く浸透し、大人から子どもまでみんなが好きなスポーツを楽しみ、競技スポーツでも本県の選手が活躍する。」群馬県高体連ではそんな取り組みをイメージしています。

まずは、われわれスポーツ活動に携わる者が、**県民の声を聴き、現状の問題点を共有し、少しでも改善しよう**と思います。その上で各世代の指導者が連携して環境を整え、**スポーツ活動の良さを自信を持って子ども達や保護者の皆さんにPRしていくべきだ**と考えています。

アンケート調査の結果、多くのデータと様々な意見が寄せられました。まだ取り組めていないこと、取り組んでいながら実現できていないことを確認し、私たちが今できることを具体的に始め、多方面に協力を仰ぎ「スポーツ健康立県ぐんま」を実現しましょう。

1. アンケート調査の概要

① 目的

高校でスポーツ活動に取り組むかどうかは「**子供の頃の運動経験が影響する**」と考えられる。「**小学生がスポーツ活動に参加するかどうかは保護者の考え方が大きく影響する**」という仮説のもと、児童生徒並びにその保護者の意識の現状を把握し、スポーツ環境の課題や問題点を明らかにする。

そして、結果を広く公表し、小・中学生、保護者に向けて運動部活動の良さをアピールしたり、本県スポーツ関係者に現状を周知して今後のスポーツ活動の活性化、スポーツ環境の充実につなげる基礎資料とする。

② 方法

小学生は、保護者と一しょに質問紙に○をつける方法で実施し、保護者には、記述の回答もお願いした。中学生・高校生とその保護者には、マークシートを塗りつぶす方法と質問紙に○をつける方法を併用し、具体的な意見を記述してもらった。

マークシートになれていない人も多く、マークミスと思われる回答も見られた。

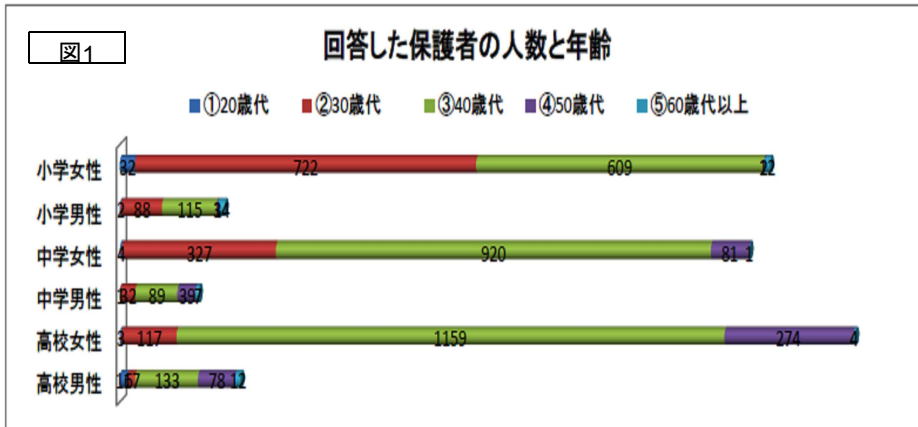
③ 対象者

県中体連、県小体研に協力を仰ぎ、小学校3～5年生、中学1年～3年、高校1年～3年を全県から各学年男女別に300人程度を抽出して、その保護者にも回答を依頼した。その結果、回答してくれた保護者は40代を中心に女性が多く、男性保護者の回答は少なかった。(図1)

④ 項目

児童・生徒…全員共通項目・スポーツ活動を行っているもの対象・行っていないもの対象等

保護者…全員共通項目・運動経験の有無・子どもの運動経験の有無・現在行っているかいないか等



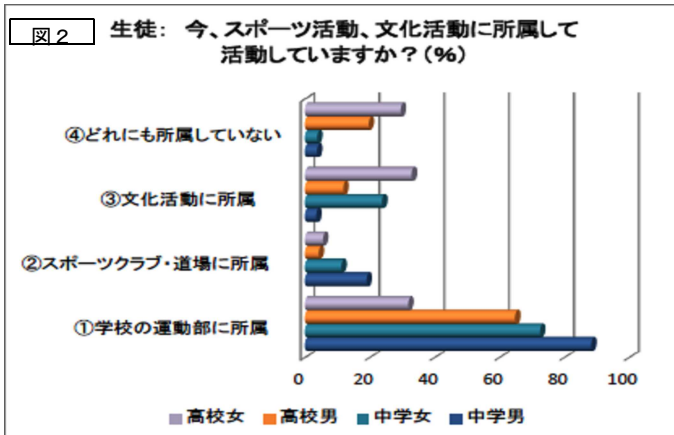
対象ではないのに答えている場合は、集計の過程で削除した。(詳細は、別冊資料を参照)

%	高校男性	高校女性	中学男性	中学女性	小学男性	小学女性
①20歳代	6	0	1	0	1	2
②30歳代	5	7	19	25	39	52
③40歳代	53	74	53	69	51	44
④50歳代	31	18	23	6	1	0
⑤60歳代以上	5	0	4	0	6	1

2. アンケートから見た「スポーツ活動の現状」

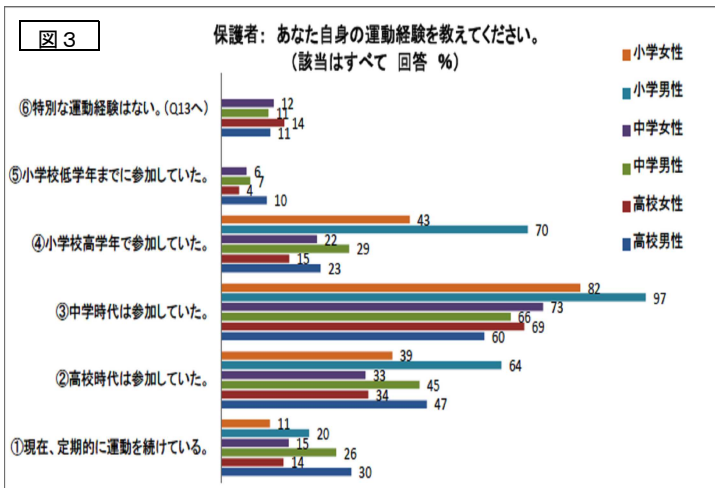
スポーツ活動への参加率は、中学生の男子は94%、女子は75%が参加しており、高校生では男子は68%、女子は38%に減っている。(図2)

保護者世代のスポーツ活動への参加率は、中学時代に男女とも7割程であり、高校時代には男性は4.5割、女性は3.5割に減っている。親の世代と現在の中学生、高校生を比較すると、現在の方がスポーツ活動への参加率は高い。(図3)



どちらの年代も、男女ともに、スポーツ活動を一番行っているのは中学時代であり、今も昔も中学校の運動部活動が、スポーツ活動の普及に大きく貢献していることが分かる。

競技を始めた時期は、中学生参加者(男子)の6%が小学校入学前、30%が小学校低学年、20%が高学年、45%が中学生から始めており、高校生でもほぼ同様の傾向が見られ、27%のものが高校生になって新たな種目に加入している。(図5、図6)



保護者の世代では、中学生男性保護者で、全保護者の7%が低学年までに参加し、→29%が高学年で→66%が中学で→45%が高校で→26%が現在でも参加と推移しており、高校生男性保護者で、10%→23%→60%→47%→30%であり、小学校高学年での参加率がやや高いものの、ほぼ同様に参加率は推移している。(図3)

幼少期から徐々にスポーツ活動を始め、中学時代に参加率がピークになり、高校で減少し、大人になって参加している人は5人に1人以下に減っている。

子ども世代も、同様に増加し高校生で減少している。大人になるにつれてさらに減少するとみられるが、この減少を食い止め、「健康に生活するための体力を維持する」「生活に潤いを与える」スポーツ活動を続けられるようにすることが課題である。

これらの結果から、次のような疑問が湧くが、今回の調査結果からいくつかヒントを見いだすことができた。

○子どもは運動好きなのに小学生がなぜ始めないのか？→きっかけ？受け皿？親の方針・負担？

○高校生のスポーツ活動への参加率が中学生に比べてなぜ低いのか？→大学受験の弊害？、勝利至上主義の弊害？、他の選択肢の増加（アルバイト、文化部、塾通い）？

○大人になるとなぜ続けないのか？→環境がない？興味関心？時間に余裕がない？

○女子はなぜスポーツから離れていくのか？→他の選択肢？ スポーツの魅力？ 女子の特徴？

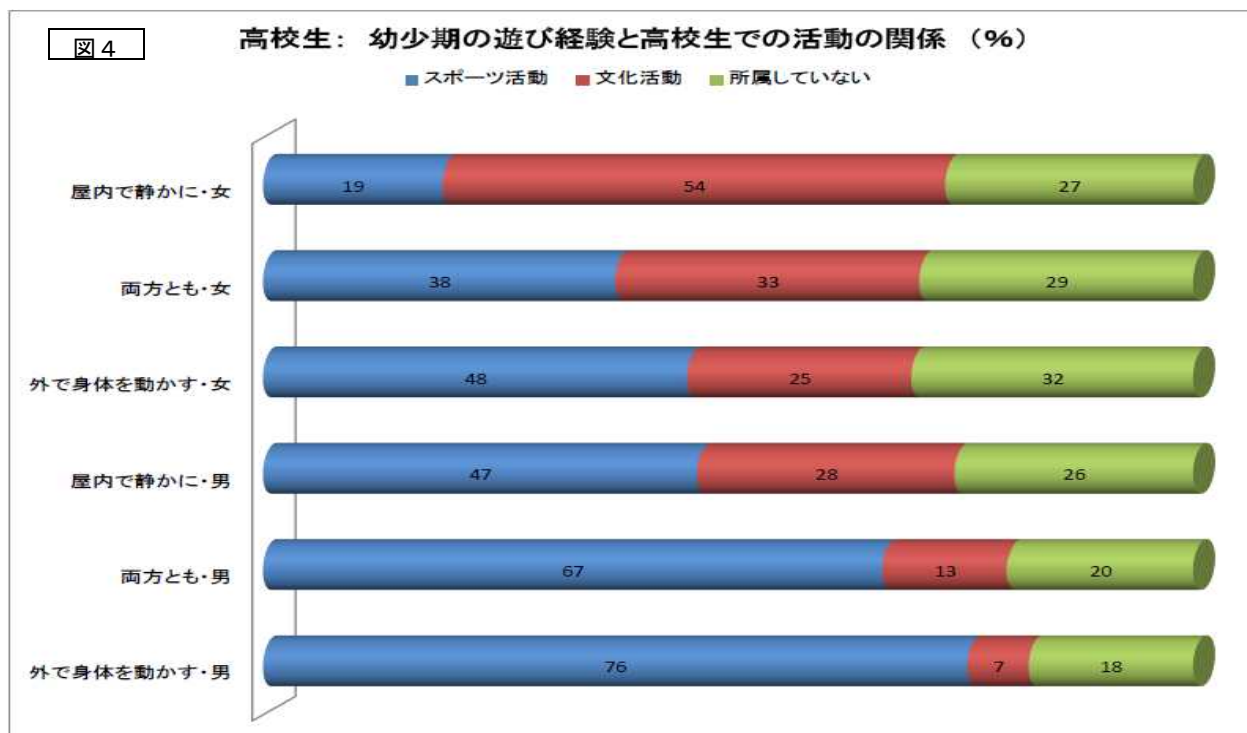
これらの傾向は、全国的な他の調査でも示されており、本県に限ったことではない。現状を変えることはできないのだろうか？

スポーツ界の発展を考えると、小学生の体力を向上させ運動好きに育て、中学生の参加者を満足させ、向上心を持っての高校で継続させたり、新しい種目を提供して高校時代の参加者を増やし、生涯スポーツにつなげることが理想である。

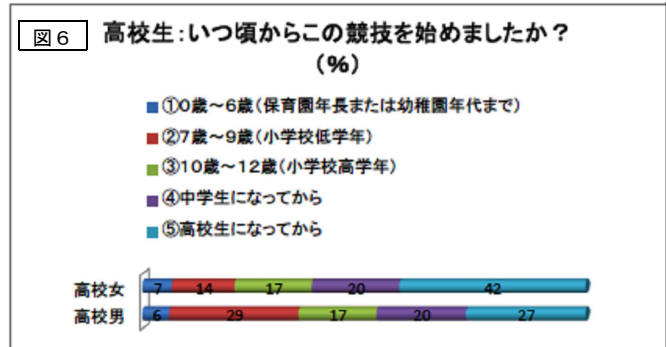
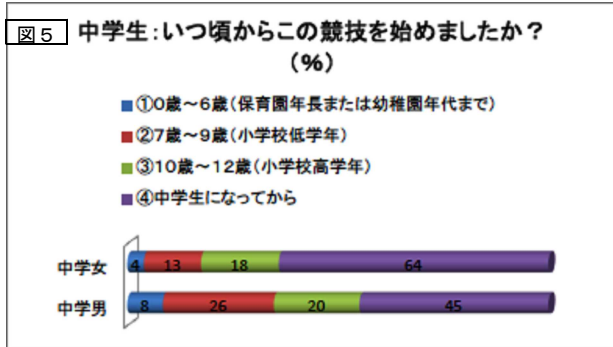
ここで、今回のアンケート調査を行うにあたって立てた仮説について調査結果から検証したい。

- ・ 仮説：①「高校でスポーツ活動に取り組むかどうかは子供の頃の運動経験が影響する」
- ②「小学生がスポーツ活動に参加するかどうかは保護者の考え方が大きく影響する」

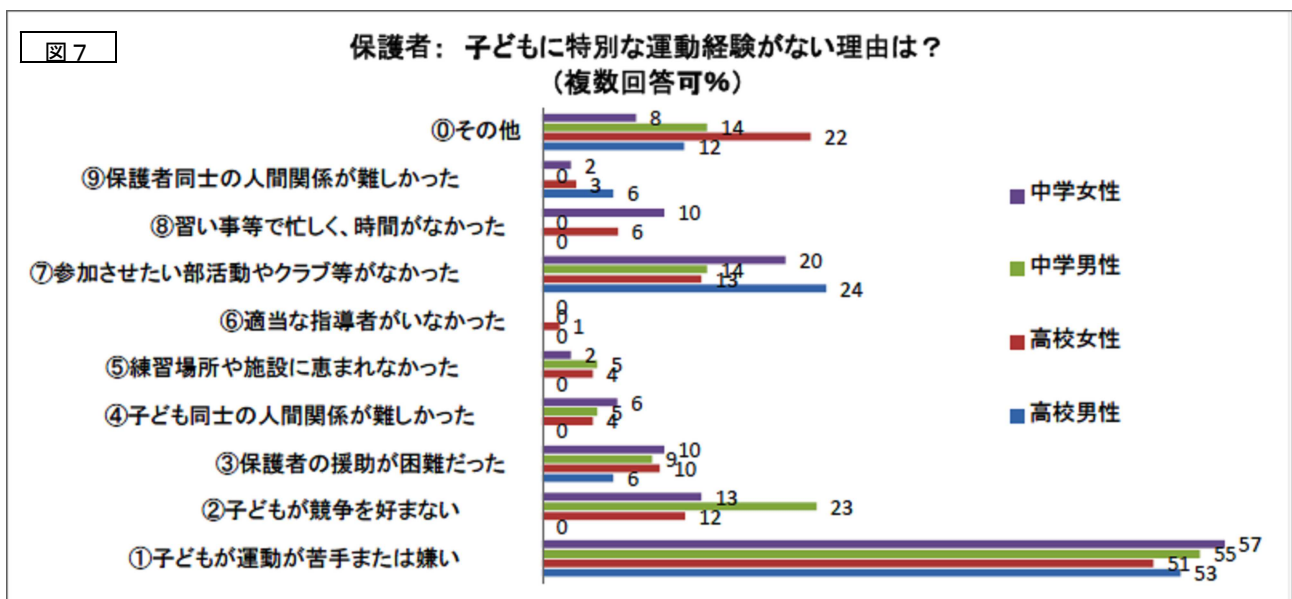
「幼少期の遊び経験と高校生での活動の関係」を見ると、屋内で静かに遊んでいた女子は文化部に所属する割合が高く、男女とも外で遊んでいたものは運動部に入る割合が高い。この結果から幼少期の遊び経験との関連はあることが考えられる。(図4)



高校で参加しているものの内、小学校高学年までに始めているものは男子52%、女子38%であり、中学生でも同様な傾向から、中学・高校で行っているものは小学校時代までに始めている子ばかりではないことが分かる。他の結果と併せて考えても、スポーツ好きになってさえいれば、中学校入学を契機に部活動でスポーツ活動を始め始める場合も多いことが分かる。また、女子は中学に入って始めるものが多く、男子に比べ小学生のスポーツ活動への参加者が少ないことがうかがえる。特に男子はスポーツをしてみたいと思う割合が高く、中学校での参加率に表れていると考えられる。(図5、図6)



全員がスポーツ活動を行っているわけではなく、小学生から中学・高校と通じてスポーツ活動を行っていないものもいることから、その理由を保護者に聞いてみると、「子どもが運動が苦手または嫌い」が半数以上であり、やらない理由が環境や保護者の意向ではなく本人の嗜好であることが分かった。

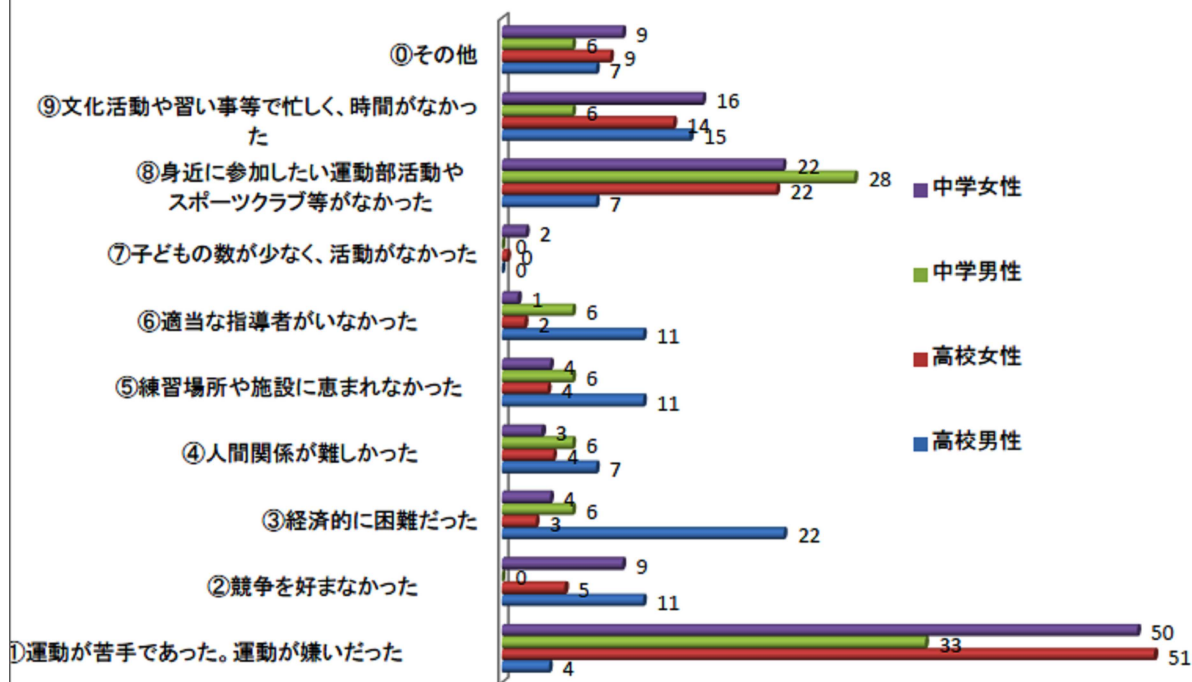


このことから、幼少期に苦手意識を持ち、スポーツ嫌いになると進学していく中でスポーツ活動を行わない可能性が高いことが分かる。保護者の運動経験がない理由を見ても同様な傾向があることから、「運動が苦手または嫌い」と思わせないことが小学生までの親や指導者には必要と考えられる。

また、身近にやらせたい活動があれば、1割から2割の子どもがスポーツ活動に参加していた可能性があったことがうかがえ、少数ではあるが人間関係や保護者の援助を理由にスポーツ活動を行わなかったことが分かった。(図7、図8)

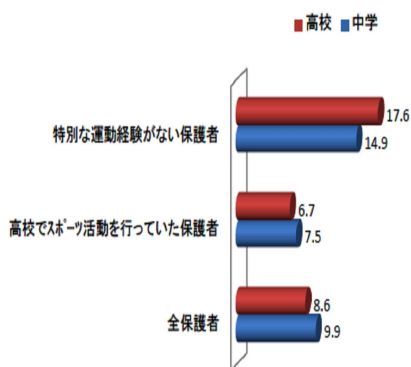
図 8

保護者：あなた自身、特別な運動経験がない理由は？
(複数回答可%)



親の運動経験と子どもの運動経験の相関をみたところ、「高校でスポーツ活動を行っていた保護者」の子どもは特別な運動経験がない割合が低く、「特別な運動経験がない保護者」の子どもは、特別な運動経験がない割合が比較的高い傾向が中学生、高校生の両方で見られた。このことから、スポーツ活動を経験した保護者の子どもは何らかのスポーツ活動を行う可能性が高いことが推測できる。学生時代にスポーツ活動を経験することが次世代のスポーツ活動に繋がる可能性がうかがえた。(図9)

図 9 子どもに特別な運動経験がない割合(%)



小学生時代のスポーツ活動の参加率は、男子で5割、女子で2～3割程度であるが、させたいと思っていて参加させていない保護者にその理由を聞いたところ、「保護者の負担・保護者同士の人間関係」、「運動が苦手または嫌い」「参加させたい活動がない」などの回答が多く、「家族の時間がとれない」「経済的な援助が困難」などの回答が見られた。また、小学校3年では男女とも「まだ早い」との回答が4%あった。このことから、「スポーツ活動の参加には保護者の考えが影響する」とい

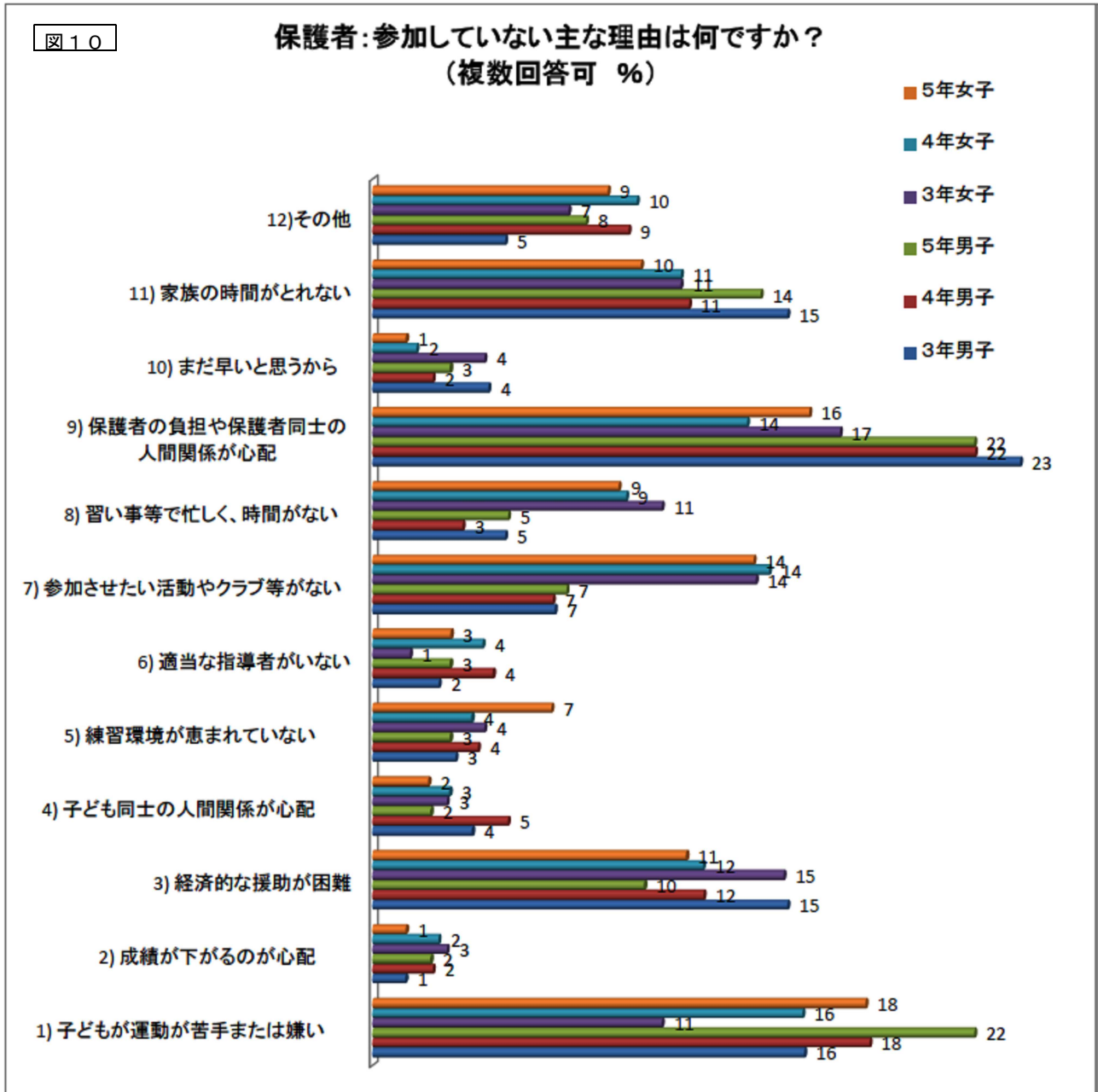
う可能性は高く、保護者の考えを変えることで参加率を高める可能性があることが示唆された。

この中で、「運動が苦手または嫌い」が男女とも学年が上がるにつれて増えていることと、女子に対する「参加させたい活動やクラブ等がない」と答える保護者が多いことが分かった。(図10)

$$\text{本人の興味・関心 (好き+得意)} + \text{保護者の意向 (価値観↑-負担↓)} + \text{環境} = \text{参加者↑}$$

小学・保護者

Q30 スポーツ活動をさせたいと思っていて、現在は参加させていない方に質問です。参加していない主な理由は何ですか？【複数回答可】



3. アンケート調査から見たスポーツに対する保護者・児童生徒の「意識・価値観」

「スポーツをするのが好きか」という質問には多くの保護者・生徒・児童が大好き・好きと答えており、どの年代でも好意的にとらえている割合が高い。また、男女差がはっきりしており、男性の方が好意的にとらえている割合が高い。逆に、嫌いと答える人も男性で5%程度、女性で10%程度いることが分かる。スポーツ観戦の興味は学年が進むにつれて上がる傾向だが、スポーツをすることが好きな割合は学年が進むにつれて若干下がっている。保護者についても、年齢構成が上がる高校保護者で低い傾向があり、スポーツ活動を行う意欲は年齢とともに下がる傾向が推測できる。体力があって元気なことがスポーツをする意欲に繋がるのが推測される。(図11、図12)

図 1.1

保護者：あなた自身、スポーツをするのは好きですか？（％）

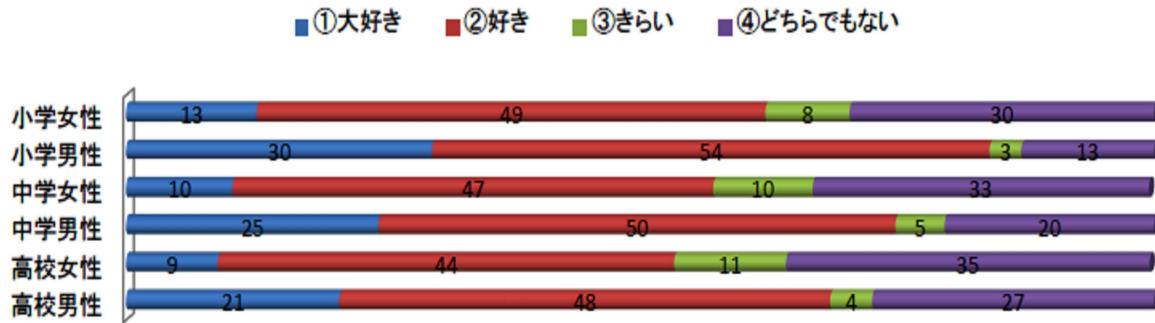
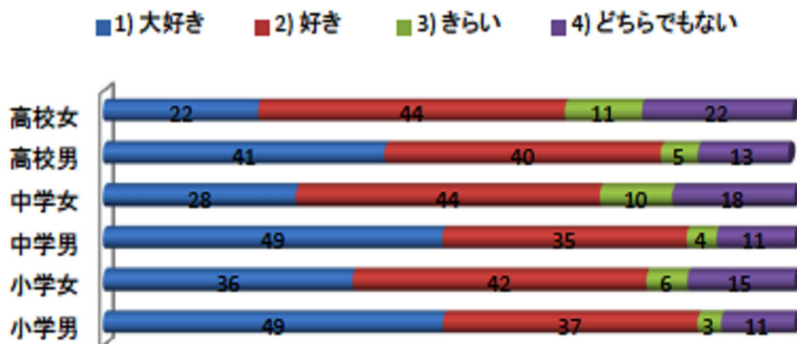


図 1.2

児童生徒：スポーツをするのは好きですか？（％）



スポーツが好きな理由は、やはり「楽しい」であり、どの年代でも一致している。

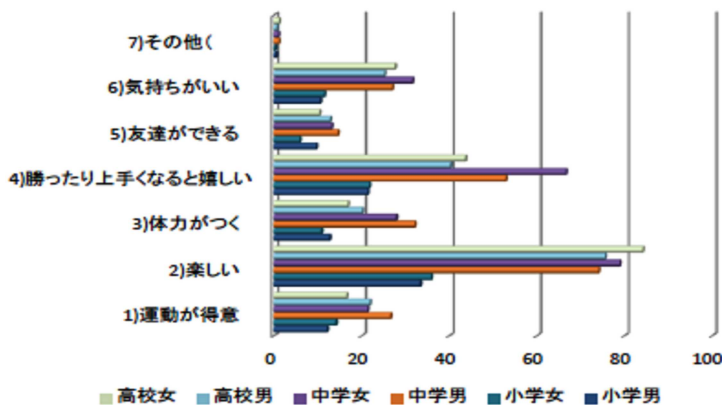
保護者においても理由の1位である。

児童生徒は、「勝ったり上手になるとうれしい」がこれにつづき、以下、「気持ちがいい」「体力がつく」といった理由が多い。

保護者では、「気持ちがいい」「体力がつく」が「楽しい」

図 1.3

児童生徒：なぜスポーツをするのが好きなのですか？（複数回答可 ⅴ）

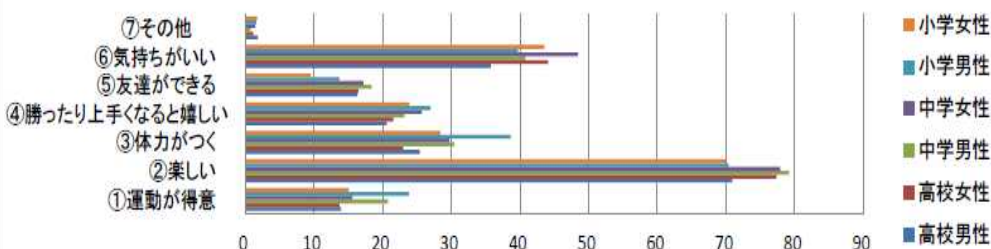


に続いて多く、子どもと大人のスポーツの魅力や価値はやや異なることが分かる。子どもの方が「勝つこと」、「うまくなること」への欲求が高いことがうかがえる。（図 13, 図 14）

「楽しい」「気持ちいい」がスポーツ活動を続ける原動力と考えられるので、指導者は、その欲求を満たしつつ上達を促し、「勝ったり上手になるとうれしい」を経験させ、さらなる向上心に繋げるイメージを持つことが大切である。

図 1.4

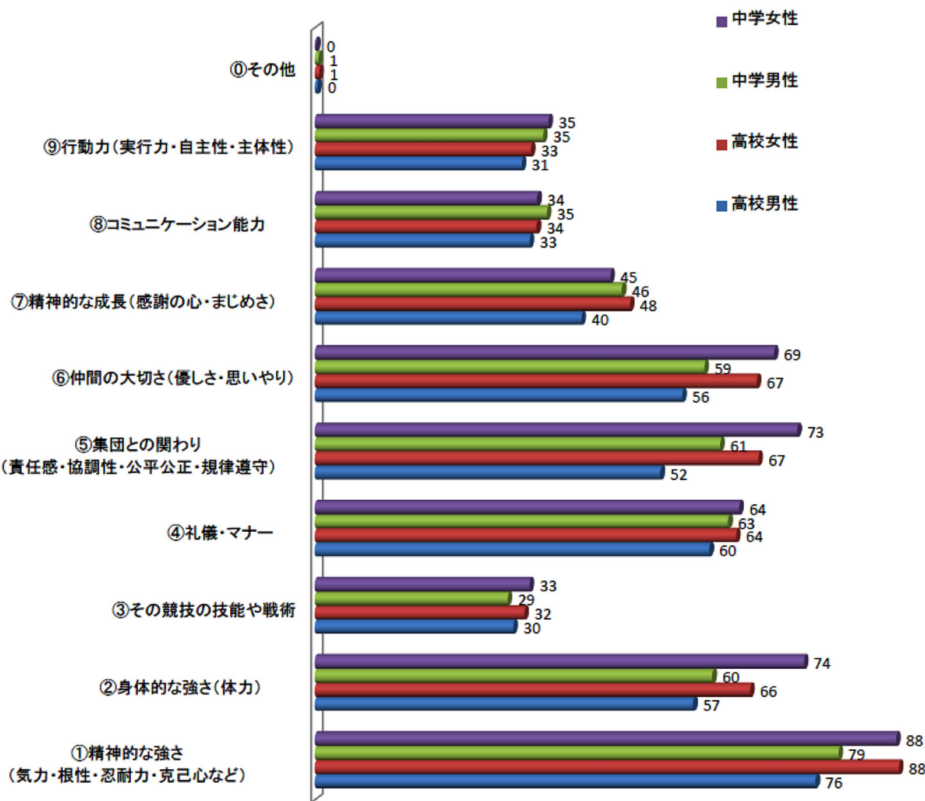
保護者：スポーツをするのが好きなのはなぜですか？（複数回答可 ⅴ）



日常の活動が、「楽しい」「気持ちいい」ことが勝利を目指す前提条件であることが分かる。

図15

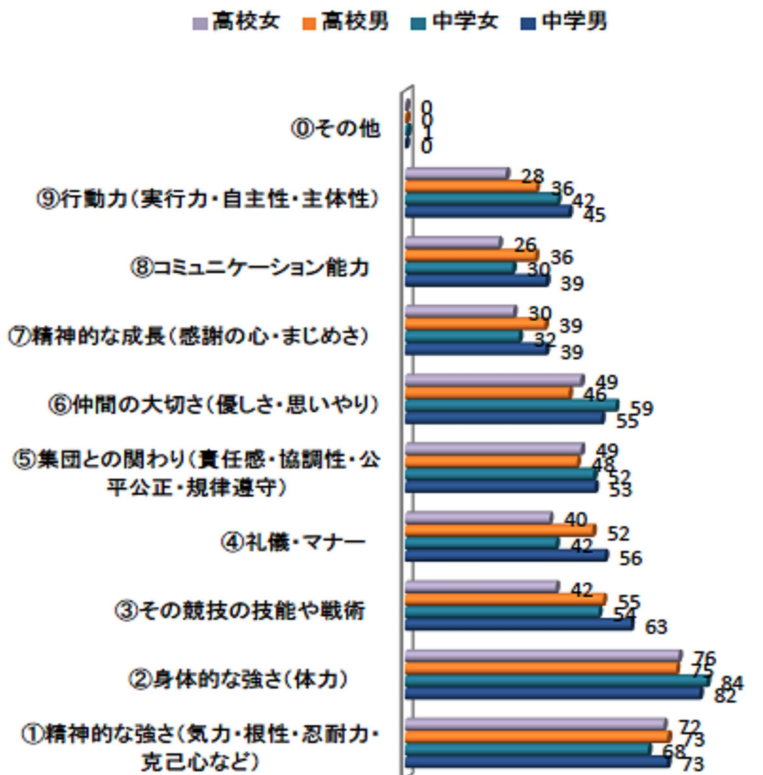
保護者：スポーツ活動において、どんな能力や態度、効果を養えると思いますか？（複数回答可％）



スポーツ活動で養える能力や態度、効果については、生徒・保護者の回答に大きな差は見られなかったが「礼儀・マナー」が養えるとの回答は保護者に多く、生徒の方が少ない。また、「競技の技能や戦術」と答える割合は生徒の方が高い。また、保護者は「精神的な強さ」を上げる割合が高く、生徒は「身体的な強さ」を答える割合が高い傾向が見られた。(図15, 図16)

図16

生徒：スポーツ活動で何が身につくと思いますか？（複数回答可％）



ほとんどの保護者がスポーツ活動の価値を認めており、子どもに「させてよかった」、「今後させたい」と思っているなど、スポーツ活動に大きな期待を寄せている様子が見られた。

「させてよかった」理由は、「精神的な成長」「体力向上・健康増進」と答える保護者が8割であり、「技術の習得」を大きく上回っている。

スポーツ活動を経験した中学生、高校生の保護者のほとんどが「参加させてよかった」と思っていることを小学生の保護者に積極的に伝え、今後の参加者増につなげたい。

(図17, 図18)

図17

保護者：子どもがスポーツ活動に参加してよかったですか？（％）

■①そう思う ■②少し思う ■③あまり思わない ■④思わない

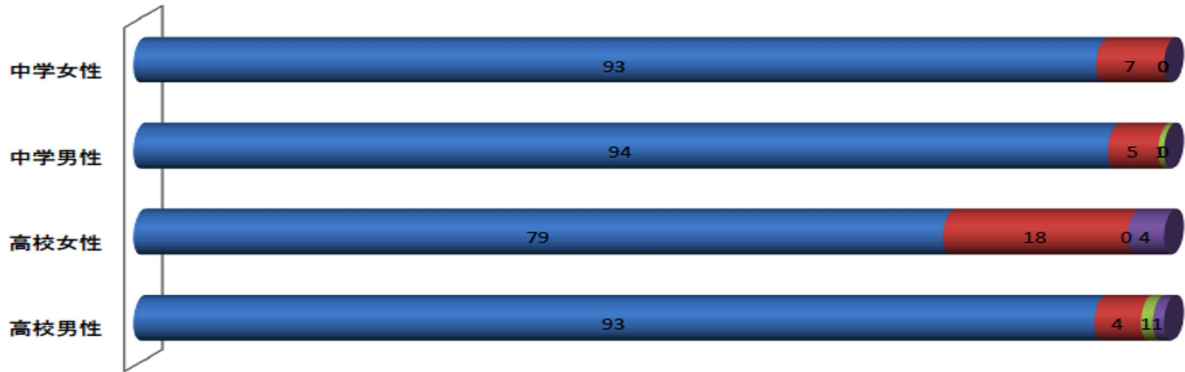
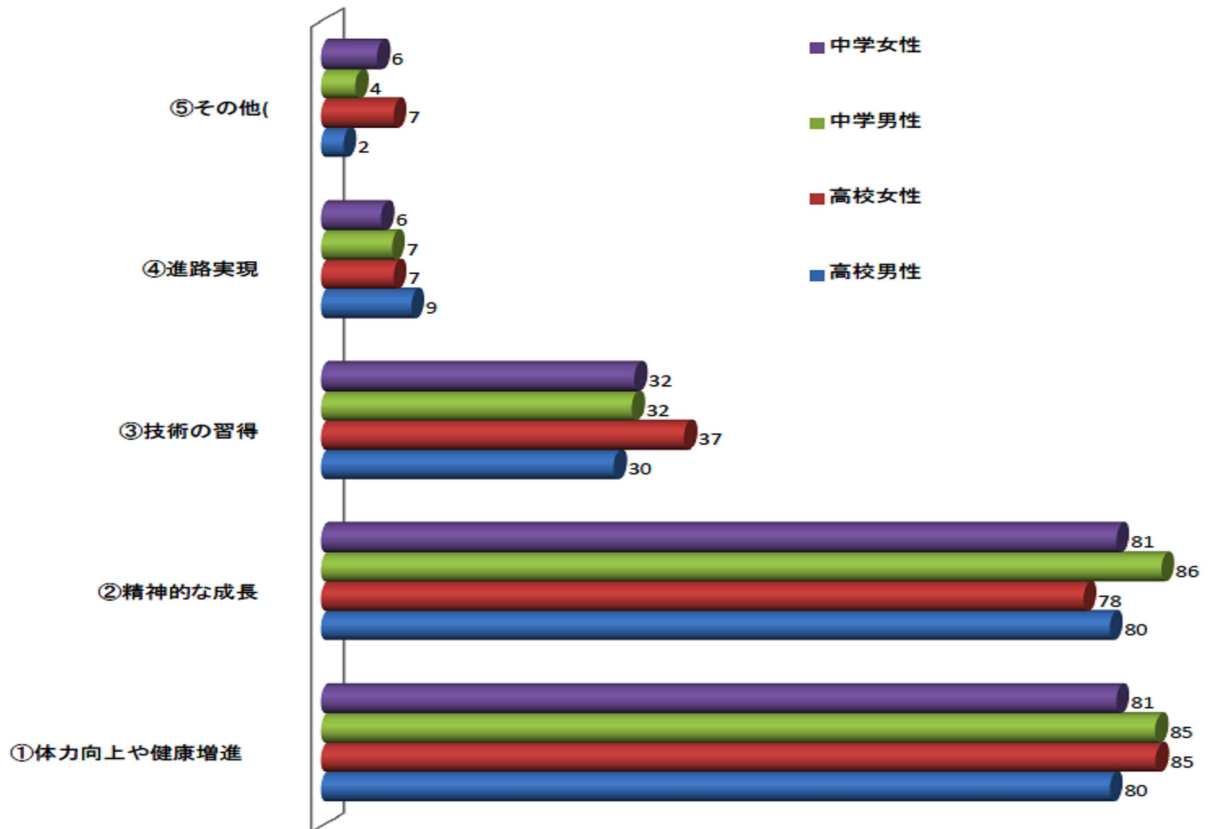


図18

保護者：子どもが参加してよかったと思う理由は？（％）



次に、「競技スポーツ」の意義についての質問では、9割近くの保護者が、勝利や記録など好成績を目指して活動することについて「とても意義がある」「意義がある」と答えており、価値があるにとらえていることがうかがえる。また、有力選手が県外の強豪校へ進学することも6割から7割程度の保護者が「どんどん出るべき」「仕方ないこと」と肯定的にとらえており、「県内の高校で活躍して欲しい」を大きく上回っていることから、競技スポーツへの期待が大きいことが分かる。本県のスポーツ環境が向上し、指導者がレベルアップを図ることで、県内で活躍する選手が増えることを願いたい。（図19、図20）

図19

保護者：勝利や記録など好成績を目指して活動することは？（％）

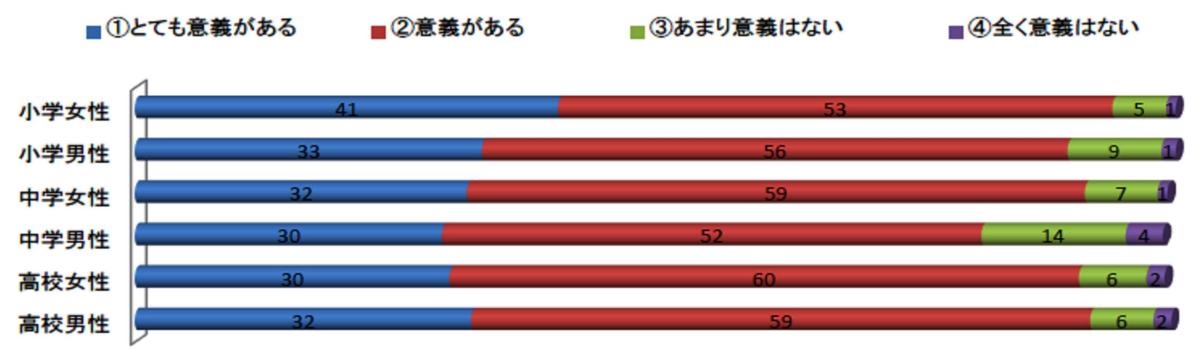
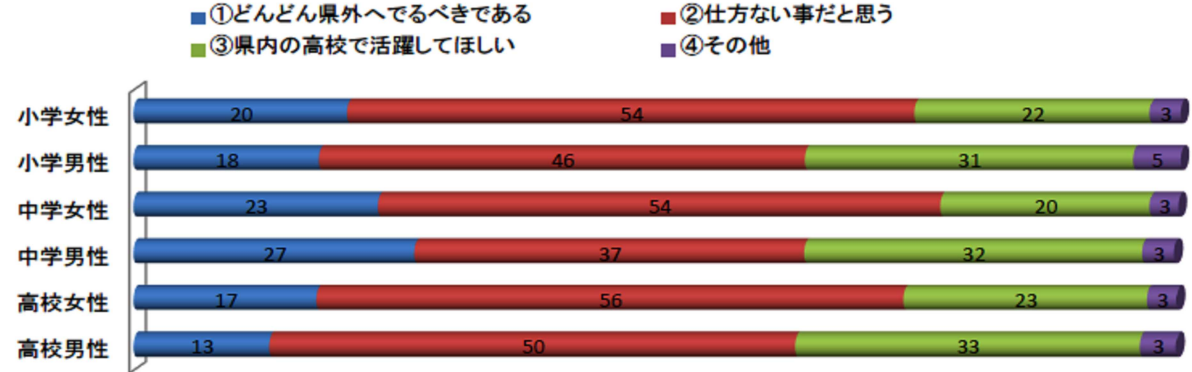


図20

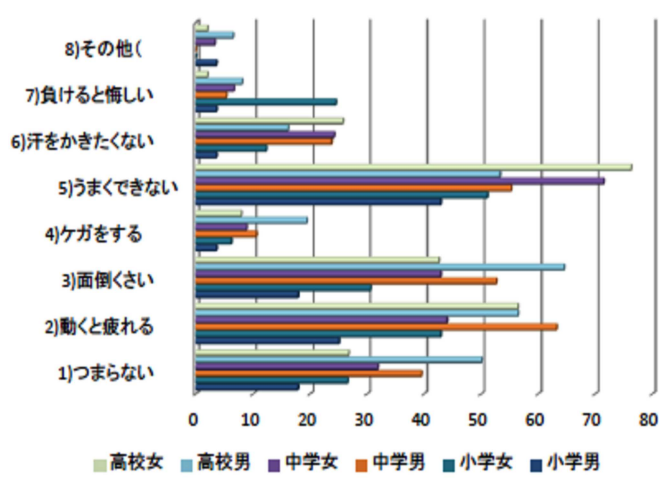
保護者：有力選手が県外の強豪校へ進学することをどう思いますか？（％）



勝つことを目指して活動することで得られる様々なプラスを認める一方で、自由記述の中では勝つことを目指すが故に出ている問題点も指摘されており、選手の年齢・発達段階によって、指導者の考え方や活動内容が厳しく問われているのも事実である。スポーツが嫌いな理由で多いのが「うまくできない」であることから考えても、目標とする技能が高すぎれば、選手は「うまくできない」と感じるわけで、相対的に仲間と比較して自ら劣等感を持ったり、嫌いになることも考えられる。（図 21）

体力的や精神的に厳しい指導を「選手が勝つために」と思って指導者が与えても、選手に向上心がなければ、効果はなく、「面倒くさい」「疲れる」となり、スポーツ活動を敬遠することもあり得る。

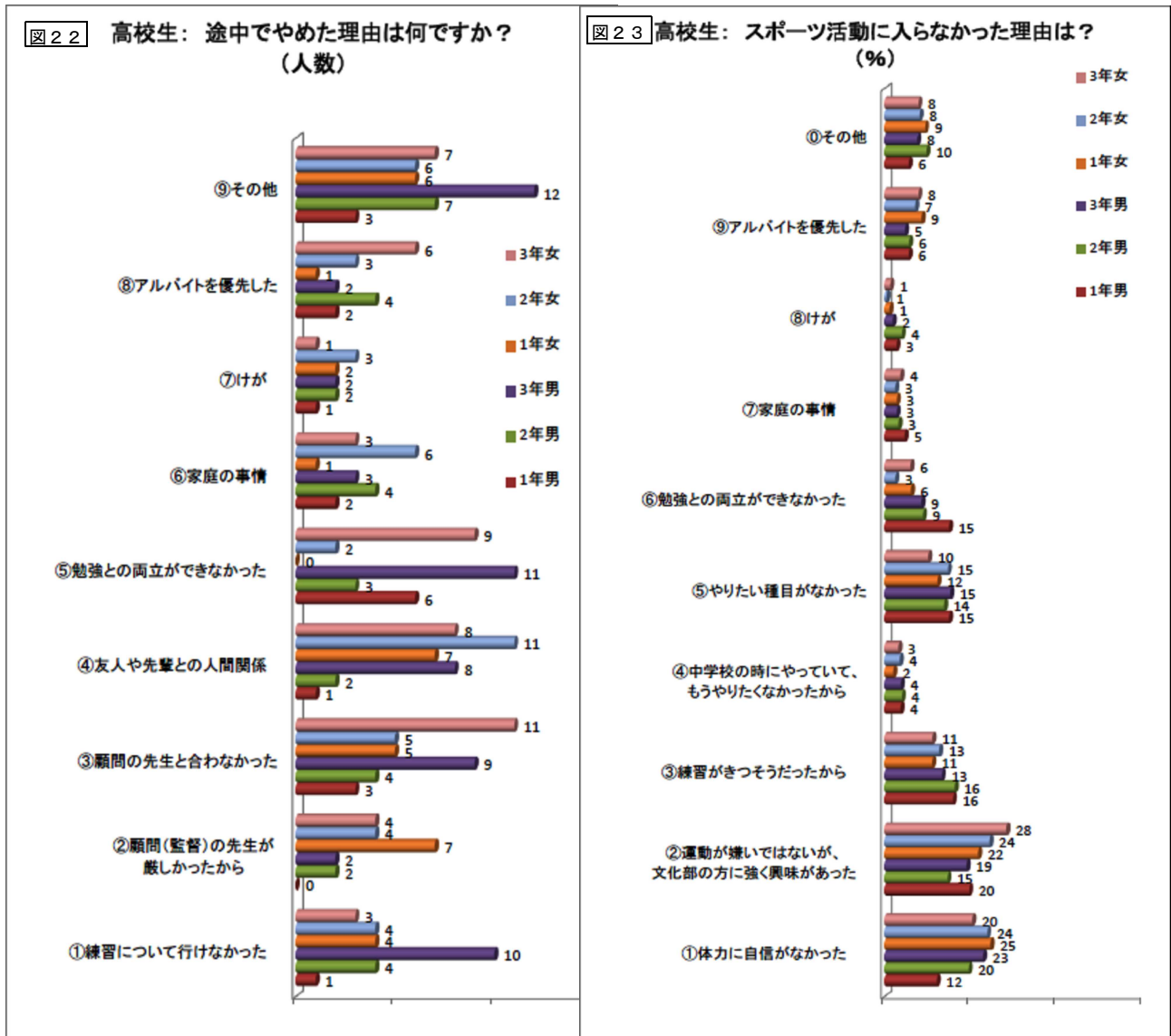
図21 児童生徒：なぜスポーツをするのが嫌いなのですか？（複数回答可 %）



「スポーツ活動を途中でやめた理由」を見ると、「勉強との両立」「友人・先輩との人間関係」「顧問との人間関係」「練習について行けなかった」というものが多い。他の活動とのバランスを欠いたり、良好な人間関係を作れないことが原因で継続しないのであればやはり「運営方法」を見直すべきではないか。

「スポーツ活動に入らなかった理由」の中で、女子は、「運動が嫌いではないが、文化部に興味があった」の割合が高い。文化部の活動も有意義であり望ましいことだが、文化活動に参加しながらも体力向上が図られるべきである。（図 22、図 23）

自由記述では、現状の問題点を指摘する声や、加熱しすぎを心配するなど、慎重な意見も見られた。スポーツ活動の価値は認めており、期待が大きいですが、やり方を間違えると途中で継続をやめるものが出てくる。特に勝つことを目指すが故に、活動がゆがみ、継続できなくなるのは本末転倒である。勝つことを目指すのであればマイナス面を出さない配慮が最大限必要である。(別冊資料)



中学生・高校生の「スポーツ活動の目標」を聞いたところ、中学生は男女とも上位大会への進出を目標と答える割合が高く（男子51%、女子47%）、競技の楽しみである勝つことを目指して活動する傾向が強い。しかし、高校生では中学生に比べ、男女とも低く（男子40%、女子22%）、特に女子では「充実した学校生活」「体力や精神力」を目指す割合が多くなっている。

全員が「インターハイ」や「甲子園」など頂点を目指した競技スポーツとしてスポーツ活動をやっているのではなく、活動そのものや、そこから得られる成長を目標に活動していることが分かる。子ども達がスポーツをやる理由は様々であって、「楽しいから」「充実した学校生活のために」「友人関係」など部活動への期待は別の場合が多い。これらのニーズに応えた上で、向上心が芽生え、競技力向上を目指し、仲間と高い目標にチャレンジするようになるのがあるべき姿であり、それをサポートするのが指導者の役割ではないか。(図24、図25)

図 2.4

中学生： 中学時代のスポーツ活動の目標は何ですか？(1つだけ %)

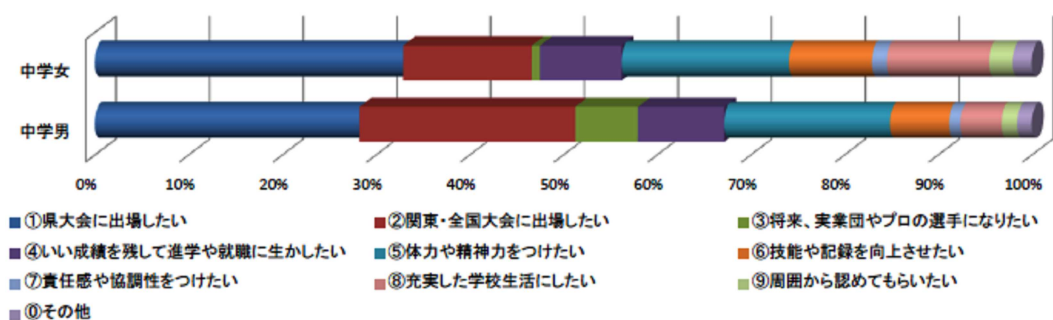
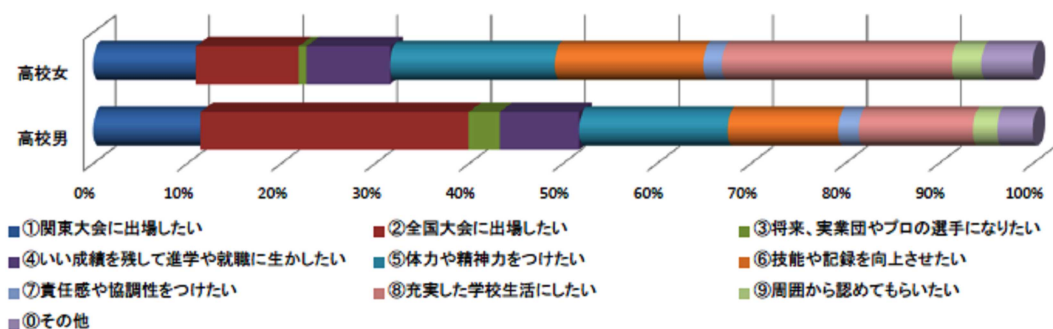


図 2.5

高校生： 高校時代のスポーツ活動の目標は何ですか？(1つだけ %)



生活や他の活動とのバランスをとり、無理なく、楽しく続けられる活動をプロデュースする力が「学校教育の一環」である部活動の指導者には求められる。クラブチームや道場などでも学校生活とのバランスに配慮をお願いし、学校が連携して多くの子どものスポーツ活動を体験させていきたい。目先の勝利だけを目指して、もし勝てたとしても部員達の将来に多くのプラスを与えたことにはならないはずであり、そのためには勝利を願う保護者にも方針を明確に説明し、理解を得る必要がある。

次に、競技力と競技を始める時期の関係を見たところ、やはり、早く競技を始めた方が上位大会に勝ち進む経験を得ていることが分かった。この結果から競技力をつけるためには幼いうちに始め、多くの経験を積むことが有利であり、中学、高校から始めた競技で上位大会へ勝ち進むのは難しいことが分かる。各種目の競技力向上と小学生の勧誘には有効なデータと考えられる。「チャンピオンを目指す活動」と「楽しく運動する活動」の両立または二本立てで子どものスポーツ活動を考えていく必要があるのではないかと。(図 26、図 27)

図 2.6

中学生： 競技開始時期と出場経験の関係 (%)

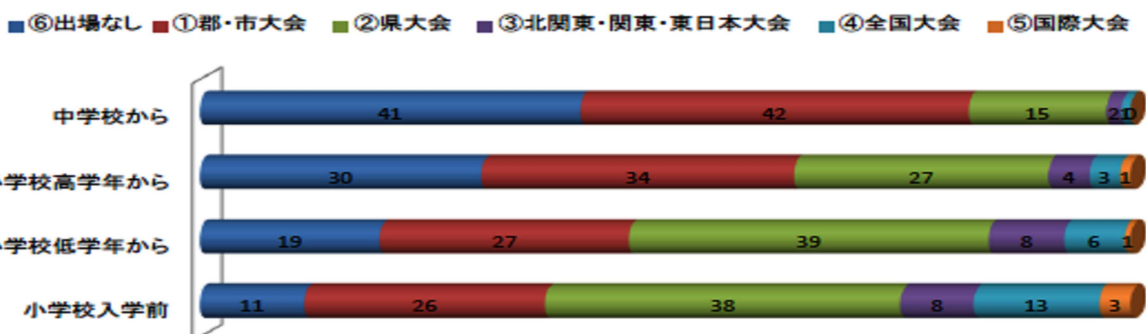
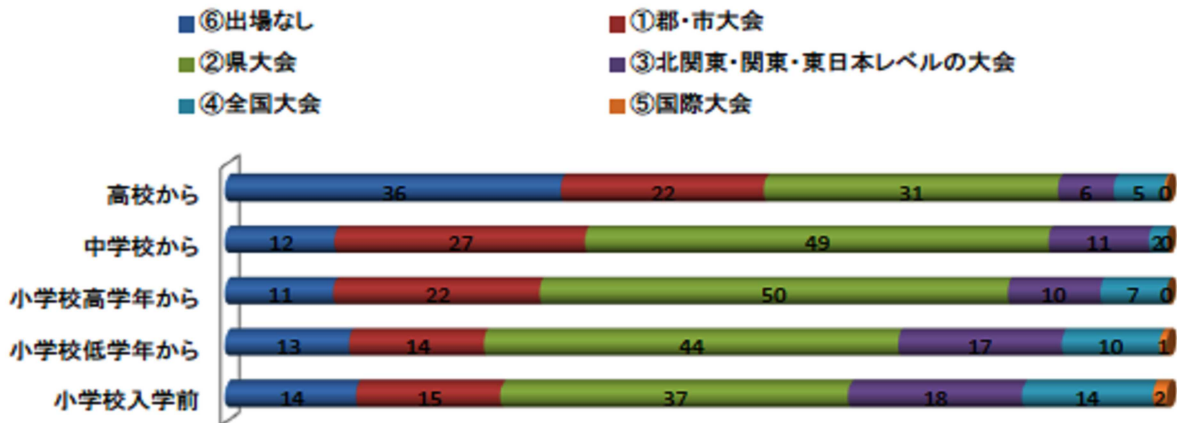


図 2.7

高校生： 競技開始時期と出場経験の関係(%)



4. 調査結果から見えた「本県スポーツ界の課題」

小学校低学年：・親の負担（遠征や付き添い・経済的）・まだ早い ・苦手意識 ・学校体育
・人間関係への不安（親）

小学校高学年：・親の負担（遠征や付き添い・経済的） ・やりたい種目がない ・苦手意識
・人間関係への不安（親・子） ・徐々に運動嫌い（特に女子） ・楽で楽しい遊び

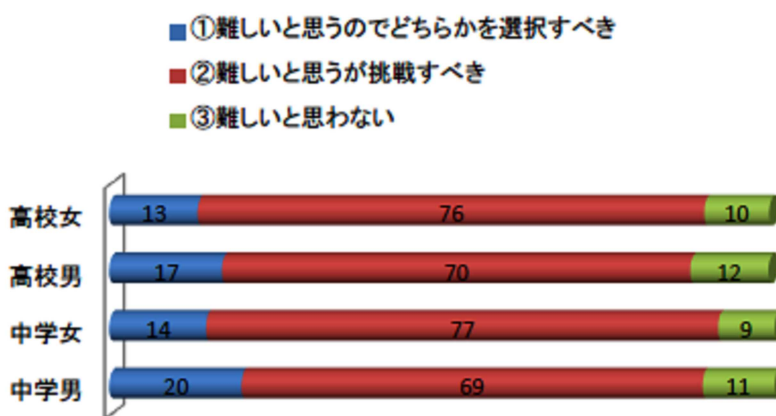
中学校：・顧問の負担 ・他の活動との両立 ・親の負担（遠征や経済的）・やりたい種目がない
・人間関係への不安（先輩・先生） ・（一部）やりすぎ・もえつき・勝利第一
・初心者への配慮 ・外部コーチとの連携 ・学校の限界（生徒数減） ・専門性

高 校：・勝利第一 ・やりすぎ ・他の活動との両立 ・加入率↓ ・他の選択肢（女子・アルバイト・文化部） ・人間関係への不安（女子）・体力的な差（1年） ・親の負担（経済的）
・限界感（目標の不一致）

大 人：・環境・時間的余裕 ・親・指導者としての次世代への関わり方

図 2.8

生徒： 部活動(運動部・文化部)と学業の両立は難しいと思いますか？(%)



「生涯を通じて仕事や家庭生活と両立してスポーツを続けて欲しい」そう考えると、中学生、高校生には高校受験や大学受験、学校での学業や家庭生活とのバランスをとってスポーツ活動を継続して欲しい。部活動と学業の両立について「どちらかを選択すべき」という10数%の生徒は片方を我慢しているということであり、どちらを選ぶにしても残念である。「挑戦すべき」と考える生徒が多いことは「どちらもやりがいがあり、将来に繋がる大事な活動」と考えているからではないだろうか。この気持ちを大切に保護者、教師、指導者がバランスを欠かないよう配慮し、支援すべきではないだろうか。個人や家庭の価値観であり強制はできないが、高体連としては生徒が魅力を感じる部活動を目指し、学業と部活動の両立を今後も広く推奨すべきだと考える。(図 28)

「生涯を通じて仕事や家庭生活と両立してスポーツを続けて欲しい」そう考えると、中学生、高校生には高校受験や大学受験、学校での学業や家庭生活とのバランスをとってスポーツ活動を継続して欲しい。部活動と学業の両立について「どちらかを選択すべき」という10数%の生徒は片方を我慢しているということであり、どちらを選ぶにしても残念である。「挑戦すべき」と考える生徒が多いことは「どちらもやりがいがあり、将来に繋がる大事な活動」と考えているからではないだろうか。この気持ちを大切に保護者、教師、指導者がバランスを欠かないよう配慮し、支援すべきではないだろうか。個人や家庭の価値観であり強制はできないが、高体連としては生徒が魅力を感じる部活動を目指し、学業と部活動の両立を今後も広く推奨すべきだと考える。(図 28)

5. 結論・提言 「群馬県が目指すべき理想像」

＝ 全員がスポーツを楽しみ、競技者は国内トップレベルへ、そして次世代へ
スポーツ活動は様々なプラスを生む。 → だからこそマイナス面を出さない配慮が必要
→ 体力・精神力だけでなく人間力・社会人基礎力といわれる力も
競技力の向上には、「①基本的運動能力」と「②経験＝専門性の獲得」が必要



※子どもの内に運動好き・得意な子に育て、永く続けさせたい。

親・学校体育・遊び が「楽しい経験」をさせる

1. 幼少期には外遊び、運動遊び。→運動好きへ

そのためには、楽しい経験をさせる「仲間」と「大人」が必要

全員に！

↑
地域社会の協力

2. 小学生には、学校体育と競技を始めるきっかけ→運動好きへ

勧誘→ させてみて楽しさを味わわせる→ほめる・認める→できる喜び 親の負担に配慮
途中でやめたくない活動＝もう少しやりたい位の活動を 競技力×

参加者増を！

↓
苦手意識×

3. 中学生には、部活動と学校外活動、続ける魅力、全般的な運動能力の向上

生徒数減で多種目の受け皿は無理。他校や地域の活動と連携。初心者への配慮が必要。

部活動は適性・興味に合わない場合もあるので→スポーツへの関心と体力UPを

次に繋がるスポーツ活動に！

特に女子には運動の機会を = 人間関係を整える

「やっている子に失望させない活動＝勝つこと」ではない 楽しさ・やりがいを！

顧問は、専門種目でなくてもOK。共通の基本（安全や人間関係）を重視して指導し、

親・生徒と部活動の意義や学校の方針、限界等を共有する。（顧問の負担に配慮）

勝利以外（取り組む姿勢や上達、フェアプレー、生活習慣、両立など）を

「認めて讃える大人」（親・指導者）、「高校での活動に期待を持たせる大人」が必要。



4. 高校生には、多様な種目の提供、専門性＝競技力を、続ける魅力、理論や自立を

参加者増を！ 受け皿はあるのに入らない。ぜひ両立させたい。仲間と考え主体的な活動を。

次に繋がるスポーツ活動に！

（適性・興味に合った種目を選択させ）「楽しさ」と「向上心」を

↑

負けても勝っても「認めて」「向上心」につなげる指導

競技力のピークは？

経験がなくても始められるような勧誘・配慮

↓

特に女子には運動の機会を（文化部↑・無所属↑）

魅力的な活動を！

体力向上やバランスのとれた生活の必要性など知識の理解が大切



5. 大人になってもスポーツを続けられる環境・全員が競技または生涯スポーツを楽しむ

参加者増を！

仕事や生活に余裕（時間・余力）をもてる生活スタイル

自ら望まなければならない！

やれる環境を整備（施設・仲間・指導者）

加齢による体力低下を防ぐために「楽しく」行うスポーツ



6. 次世代を育てる（指導者・親になり子どもへ）

いい経験をした人が指導者（教員）に。
支援者増を！ 子どもと一緒に「楽しく」参加。事情に応じて、できる範囲で支える。

平等な支援は無理なのでやれる大人がやれる範囲で。「親の事情で参加できない」は避けたい。

6. まとめ・今後の課題

県中体連、県小体研の協力を得られた結果、膨大な資料が得られた。今回の分析はほんの一部分であり、今後、違った視点での分析が可能である。

結果を広く還元しなければ今回の調査の意味はない。中体連、小体研にフィードバックするだけでなく、広くスポーツに関わる人々に知ってもらい、連携を深めていきたい。小学生やその保護者に知ってもらうのが最大の課題である。すべての資料を群馬県高等学校体育連盟HPにPDFファイルでアップするので、ぜひ多くの方にカラー画面で見いただきたい。(http://gunma-koutairen.com/)

今回の調査には方法や設問に問題点も見られた。さらに、必要な項目を考え再度機会を作りたい。

調査を通じて、改めてスポーツ活動に対する期待の大きさを自覚した一方、中学・高校時代にスポーツ活動ができるのは「幸せなこと」だと実感した。当然、平和でなければ成り立たないし、様々な事情で参加できない生徒もいるし、高校生でアルバイトを優先するものもいる。文化的な活動も有意義である。理想的な活動にするのも大変でマイナス面も考えられるが、家庭の事情が許せば、ぜひスポーツ活動を体験させたい。お金には換えられない価値がある。

競技である以上勝つことを目指して努力をするわけで、「勝負事は勝たないと…」という価値観が大人の社会でも浸透しており、勝者が讃えられ脚光を浴びている。勝者がすごいことは当然だが、敗者もまた讃えられるべきである。勝利は活動の善し悪しを判断するひとつの要素であるが、すべてではない。負けても讃えられるような活動をすべきである。「気合い」や「根性」と聞くと昔の精神主義だと言われるようになったが、競技には絶対必要な要素であり、文化活動や受験勉強、仕事でも求められる「意志」「根気」といった「精神的な強さ」を表す言葉であって、これに期待する声も多い。勝ったあと、負けたあとに何が残っているのか？次なる目標達成に繋がる貴重な経験になっているのか？そこにこそ、心をひとつにして勝利を目指す意義があるのではないだろうか。

学校における教育内容は、「これからの社会に高い体力は必要ないのではないか」という意見もあり、大きく変化している。高校における「体育」は、3年間で7～8単位（280時間程度）であり、平成になった頃の男子11単位に比べて激減している。体力向上には明らかに不十分であり、技能の向上もままならない。体育以外に運動する機会は、部活動以外ではほとんどないのが実態である。日本の学校には施設があって、仲間がいて、多くの部活動があり、放課後すぐにスポーツ活動を楽しむことができる。この利点を生かして多くの生徒が生涯を通じて活動的に生活できる体力の土台を身につけて欲しい。

そして、高体連研究部としては、

- ・ 少子化の時代にどんなスポーツ活動ができるのか？（適材適所・合同チーム）
- ・ 子ども、特に女子の体力向上はどうすべきなのか？
- ・ 子どもも大人もスポーツ活動に参加したくなる社会にするにはどうすべきなのか？

こんな課題を持って今後も研究活動に取り組みたい。

※最後にご協力いただいた皆様、お読みいただいた皆様へ研究部からのメッセージです。

（これらの思いが各方面に伝わるような「結果の公表方法」を来年度検討します。）

1. 小学生の皆さんへ

体を動かす遊びや体育の授業など運動が好きな小学生が多いことが分かりました。世の中にはたくさんさんのスポーツ種目や武道があり、多くの人が楽しんだり、チャンピオンを目指して頑張っています。今、皆さんが参加できる身近なスポーツは種類が少ないと思いますが、中学、高校に進むと、やりたい種目に出会うことができます。サッカーをやっていた子がラグビーで活躍したり、野球をやっていた

た子がバドミントンを始めたりできます。今できるスポーツ活動に参加して上手になれば、あとで他の種目を始めてもがんばれる力や運動能力が身につきます。オリンピックやプロスポーツを目指してもいいし、中学・高校の全国大会で活躍するのもよい目標ですが、**今、スポーツが好きになり、得意になればこれから先、大人になっても仲間を作って永く楽しめます。保護者にやりたい気持ちを伝え、友達も誘ってみてください。**家族の協力も必要なのでよく相談して始めてください。すぐに友達ができて、きっと楽しみが増えるはずです。

2. 小学生の保護者の皆さんへ

事情が許せばぜひお子さんに参加させてください。中学生、高校生の保護者のほとんどは「参加させてよかった」と感じています。人間関係の煩わしさや休日がなくなること、活動の付き添いや遠征の送迎、お茶当番などの慣習に負担に感じ、参加させるのを躊躇する方も多いようですが、**子どもの才能を最大限開花させるには子どもの頃の運動経験が必要です。**スポーツ活動は万能ではないし、本当に望ましい活動にするのは大変です。やり方次第でマイナス面も出てしまいますが、有意義な活動になると信じてきっかけを与えていただきたい。チームの運営に保護者の協力が必要なことも事実ですが、平等な支援ではなく「**できる範囲の協力**」で子どもに参加させられる**チーム運営をスポーツ少年団や競技団体を通じて働かかけます。**親の仕事や負担が理由で参加できない子どもを減らすことが今後の課題だと考えています。子どもの参加を通じて保護者も仲間を増やし、生活の楽しみにしてもらえれば理想的です。

3. 中学生、高校生へ

改めてスポーツ活動への参加をお奨めします。どの競技もそれぞれおもしろさややりがいがあります。**厳しさやつらさ、人間関係の難しさなど「壁」はありますが、仲間や顧問の先生とともに考え、話し合っ**て乗り越え、**目標達成を目指すスポーツは、今しかできないことの一つです。**トーナメントの大会が多いので、ほとんどの人は負けて終わりますが、負けから得るものは大きいし、悔しさが次へのエネルギーになります。「少々汚いことをしても勝てばよい」とか、「負けたことを仲間のせいにしたり、審判のせいにする」のではスポーツ活動を経験する意味はありません。正々堂々と競い合っ**て勝っても負けても他者を尊重した態度がとれる。**そんなスポーツマンになってください。楽で楽しい遊びもありますが、上達を目指し永く続けることで充実した生活を送ることができます。ただ「楽しい」だけでは贅沢な遊びであってスポーツ活動は社会で推奨されません。やらせてもらえることに感謝し、**他の活動とのバランスを欠くことなく、向上心を持って、本気で取り組んで欲しいです。**それができれば必ず「価値ある活動」になるはずです。

4. 中学生、高校生の保護者の皆さんへ

中学、高校では昔も今も部活動が子ども達の趣味・特技を支えています。中学ではやりたい部活動がないことが多いですが、他のスポーツにも楽しみやプラス効果があります。クラブチームや道場など地域の活動に参加させるか、中学校の既存の部活動に参加させ、充実した学校生活を送らせてください。**高校では、運動部、文化部ともに必ず選択肢が広がります。**また、顧問である教員は、競技の経験者でかつ優秀な指導者ではありません。「習い事」ではなく生徒達による主体的な活動です。すべての教員が業務の合間にやりくりして生徒の部活動を支えています。やりたい種目がない、顧問の専門性が低いのは仕方ないことと考え、部活動の運営をサポートしてください。競技経験がなくても選手とともに活動を工夫し、よいチームを作ったり、好成績を収めている顧問も多いです。外部コーチ

に協力を得る「地域との連携」も進めています。将来的には中学・高校・大学と競技を続け、専門性を身につけた選手が各教科の教員免許を取り、教員になり各競技の指導者となって将来の群馬県を支えて欲しいと願っています。勝利にこだわれば他のチームと「境遇」を比較することになりますが、部活動は現状の環境の中で工夫して活動するものだという意識を生徒にも持たせてください。中学・高校の部活動には「競技力」という意味では限界があります。勝敗だけで活動を判断するのではなく、すべての部員が他の活動とのバランスを欠くことなく、向上心を持って次のステージへあがれるように応援をお願いします。

5. 指導者、関係者の皆様へ

日々の仕事や家庭生活に追われる中、皆様のご苦勞のおかげで現状のスポーツ活動を運営できています。少子化のこの時代に、すべての競技種目が火を絶やすことなく、存続していくために、少数意見であっても改善できることは取り組み、一人でも多くの子どもが参加したいと思える活動を展開してください。小中高と年代で課題は違うと思いますが、連携して各競技の魅力を発信し、永くスポーツ活動を続ける子どもを増やしましょう。

多くの方々が選手の勝利を願って最新の情報を集め、熱心に技術や戦術を指導されていると思います。勝利の喜びを経験させることも大切ですが、ぜひ社会や親からの期待の大きさを自覚し、「安全配慮」や「人間関係の調整」、「負担の少ない運営」等をお願いします。チームを任された指導者は、チームの目標や行動規範を示し、選手と話し合い、共有することが大切だと思います。そして保護者にも説明し、そのために関係者全員がそれぞれの立場で動くことが必要です。「生徒は楽しくやりたいのに、顧問は勝たせたい。保護者は生活指導をして欲しい」これではトラブルが起こります。何を目指した活動なのか、そのためにどう動くのか、それが共有できていれば良い悪いの判断にみんなが納得するはずです。はじめからチャンピオンを目指してスポーツを始める人はいません。楽しみを感じ、上達して、有能感を持ち、悔しさも経験して初めて勝負へのこだわりが生まれ、厳しい練習も苦ではなくなるのではないのでしょうか。この発達段階をとらえた目標設定が必要です。小・中学生でスポーツ活動を始めたばかりでルールも知らない子どもに「優勝しよう」と言って特訓を課してもハードルが高すぎて気後れします。逆に優勝したいと意気込んで練習している選手達に練習を制限したり試合をさせなかったら不満を持つはずです。また、選手は「勝ちたい」と言っているのに行動が伴わないから顧問はいらいらして怒ってしまう。こんなトラブルは「目標を共有すること」で防げるのではないのでしょうか。

最近めざましい躍進を遂げている日本のサッカーは、JFA2005年宣言を掲げ、10年計画で世界に通用する選手を排出し、代表チームが世界で勝利するための取り組みを行ってきました。代表チームの強化とともに、ユース育成・指導者養成を目標に、フェアプレーや基本技能を徹底することに加え、教えすぎず自分で考えさせ成功と失敗を経験させるようにしたり、服装や受け答えといったピッチ以外の指導も重視してきたそうです。好奇心を持って質問したり自己主張ができる「言語技術の習得」を重視し、勝つために高い人格を持った自立した選手の育成を目指してきた結果があらわれてきたそうです。どの競技を経験しても、選手には他者を尊重できる人格者に育てて欲しい。そのためには、指導者がそれを意識した活動を心がけなければなりません。他の競技の良いところを取り入れ、参加者全員がやりがいや向上心を持って取り組み充実感を得られ、選手が感謝の気持ちを持てるようなスポーツ活動をお願いします。

莫大な費用がかかる施設の整備や部活動指導のできる教員の育成などは、ひとつの競技団体やチーム単位ではできません。スポーツ基本法のもと、スポーツを取り巻く環境の整備には、県や市町村、

地元企業や大学などの大きな力に協力をお願いしたい。スポーツに関わるものが正しい「スポーツ活動の価値」を共有して、「体罰問題」のように後ろ指をさされることのないスポーツ界を構築し、立派な大人を社会に送り出す。これを多くの人々に認めてもらうことで大きな支援も受けられるのではないのでしょうか？。関係者が連携を図り、「普及」と「強化」と「教育」を目指し、これらを両立することによって魅力あるスポーツ活動を構築しましょう。

【参考文献・資料】

ぐんまスポーツプラン2011（平成23年3月 群馬県教育委員会）
運動部活動での指導のガイドライン（平成25年5月 文部科学省）
中学校・高等学校運動部活動指導資料（平成25年8月 群馬県教育委員会）
全国高体連研究大会紀要 他

平成26年3月 群馬県高等学校体育連盟研究部

部長 高橋 紀幸（高崎北高校）
濱田 豪（沼田高校）
篠原 礼子（清陵高校）
渡邊 恵里（桐生高校）
森山 弘（大泉高校）
堀越 光朗（前橋西高校）
田代 一好（伊勢崎興陽高校）
矢島 飛鳥（嬭恋高校）
奥山 秀徳（万場高校）